



6月16～18日、東京で第38回労協連総会、労協連35年史の出版を記念したレセプション、センター事業団第32回総代会を開催した。

総会は、直前の15日に共謀罪が国会で強行採決される中、その怒りと緊張感に包まれつつも、協同労働の協同組合法制化の実現をたぐり寄せている状況を反映して、「抵抗と創造、自治を高める」との決意を参加者全員で固め合う場となった。総会では40年にわたり労協運動のリーダーとして第一線の運動をリードしてきた永戸祐三理事長が理事長を退任、新たに古村伸宏専務が新理事長に選出、総代会では藤田理事長が退任、新たに田中羊子専務が新理事長に選出された。

退任された永戸理事長から、新リーダーの選出、新役員体制の確立にあたり、その思いを語られたので紹介したい(総会、総代会が終わったばかりで記述しているので全体の詳細は労協新聞を参照いただきたい)。

「社会の歴史的時代的転換期を迎えており、これまで当たり前だと思っていた根拠が崩れ、新しい価値観が生まれはじめようとしている。科学万能主義、物質万能主義の終焉は、資本主義の終わりの時を告げている。2020年に戦後75周年を迎えるが、安倍政権は戦後政治の総決算として政治権力と市場権力を行使し、2019年の新天皇即位、2020年東京オリ

ピックを狂騒の中で迎え、憲法改正を目論んでいる。決して許されないことであるが、一方で許してしまう土壌が市民の中に存在している。日本は民主主義社会と言いつつ、国民主権と基本的人権の後退を許している。この3年間は、日本の民主主義が総括される3年間であり、民主主義を全ての場所で高めることが求められている。2017～2020年、この3年は、権力の抑圧策動に徹底的に抵抗すると共に、あらゆる人びとと新しい社会を創造し、自治を高める闘いを展開すること。一つは、日本会議と結んだ明治憲法への復帰策動、強権的国家主義を実践している安倍政権に対して、一人ひとり、組織をあげて抵抗し、全ての人が人間の尊厳をかけて闘う3年間となる。もう一つはワーカーズコープの飛躍的発展が社会に何をもたらすのか問うことである。この3年間、私たち組合員は労働者性と市民性を高い次元で統合する。その中で最も重要なことは仲間同士の関係、地域の人との関係を『働く』だけの関係性から、生活と地域の全てをかけて『人間』の関係へとつくり変えていくこと。つまり、ワーカーズコープが自らをして小さな社会をなす、という関係に変えるということだ。日本社会は工業都市国家に突き進んで自然の土壌を奪い、都市でブラック企業をはびこらせるような、まともな仕事を提供することができなくなった市場

経済と国家の中にある。私たちワーカーズコープは、人間的でまともな仕事を地域からつくり出していかなければならない。農林業などの一次産業や子育て、高齢者介護、就労支援などの仕事を市民が地域からつくり出すことだ。その意味では、抵抗以上に創造することが求められる。これまでの労協連40年の歴史をこの3年に凝集する取組みをしてほしい。自治ある社会とは、一人ひとりの市民が自立し、協同連帯し自らが地域をつくる主体になることだ。10月7、8日に滋賀県で開催する全国協同集会は各地で自らの地域をつくる取組みを序曲としながら、本集会で大きなコンサートとなるようにしたい。最後に、設立3年目を迎えるはんしんワーカーズコープの総会に出席したが、運動の原点に戻る思いがした。はんしんの若いリーダーの同級生が出席され『彼らを見ていると、人は変わる。人は変えられるものだと思った』と言われた。人には無限の力があるということ、人は成長できる。人を信頼するというこ

とが全ての基本的前提である。最後に、無駄に終わるとしても全ての取組みに、ありったけの情熱と心からの愛情を注いでほしい。リーダーには、感性豊かな人間味あふれる人間になってほしい。そして、そういう組合員を育ててほしい。自らが感性豊かな人間になるために、自分自身の心を鍛えてほしい。何事にもおびえず、おごらず、勇気を持って3年間の闘い、協同労働の運動・事業に力を注いでほしい」と。

私たちは永戸前理事長のこの思いを受けて、2017年度からの運動・事業に向き合っていきたいと思う。そして、これまで労協連38年の歴史を次世代リーダーに引き継いでいくために、労協連35年史「みんなで歩んだよい仕事・協同労働への道、そしてその先へ—ワーカーズコープ35年の軌跡」(A4判・302頁、2,000円)を発刊した。

会員・研究者の皆さんにぜひご一読いただければと思う。